



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 超限界集落のエスノグラフィー ――後期高齢者だけの生活と集落存在の意義――   |
| Author(s)    | 岩井, 恵子  |
| Citation     | 大阪大学, 2019, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/72461">https://hdl.handle.net/11094/72461</a>   |
| rights       |   |
| Note         | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

|  |                                     |
|--|-------------------------------------|
| 氏 名 （ 岩 井 恵 子 ）  |                                     |
| 論文題名   | 超限界集落のエスノグラフィー ―後期高齢者だけの生活と集落存在の意義― |
| <p>論文内容の要旨</p> <p>1955年以降の高度経済成長に伴い、農山漁村地域から都市地域へ向け若者を中心として大きな人口移動が起こり、過疎地は全国に広がった。大野晃（2005）は65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落を「限界集落」と呼び、この限界集落は年々増加し、山間地集落においては特に多くなっている。そのような中、2011年、限界集落と化した和歌山県南部のわずか13人の高齢者だけの（高齢化率100%）集落の人たちと出会った。しかし幸せそうに話をする住民に、「限界集落」という言葉は全くそぐわなかった。そこで過酷ともいえる環境の中、幸せそうに生活している住民の幸せの要因を分析し、後期高齢者だけの生活と集落存在の意義を考察した。</p> <p>第1章では今回の調査の概要を説明した。調査期間は2012年4月から2018年3月の6年間で、月1回、計76回現地を訪問し調査を行い、健康診断を年2回、計12回実施した。調査場所は和歌山県串本町の標高107mの山間にある、A集落とB集落（約3km離れている）からなるS集落である。対象は研究開始時にS集落に住む13名全員で、A集落は5世帯7名（男性2名、女性5名）、B集落は4世帯6名（男性2名、女性4名）で、年齢は74歳～92歳（平均年齢81.4±5.8歳）であった。研究方法はエスノグラフィーを用い、集落の機能、住民の生活、住民間の人間関係、ネットワーク、住民の健康などの詳細な情報を得た。また健康診断時には健康や生活に関するアンケート、改訂PGCモラールスケールの測定、認知機能の測定としてHDS-R、MMSEを行い、経年変化を分析した。第2章では、S集落が限界集落になった過程を町史などの資料と、住民たちの語りから明らかにした。S集落の歴史は7世紀にまで遡り、1980年代までは林業、農業を生業として栄えていた。しかし、1990年頃より林業の衰退に伴い多くの住民が集落を去り、高齢者だけが残った。1973年には29世帯100名の住民数であった人口も、2000年ごろには限界集落となっていたと推測される。調査期間中にも5名の住民が集落を去り6世帯8名となった。第3章では集落のエスノグラフィーとして、集落の環境、機能を検証した。集落への道路は整備されていたが公共交通機関は週2回、麓6.5km離れた麓のJR駅まで往復する乗り合いタクシーのみで運転免許証を持たない女性にとっては自由に移動することができなかった。集落には住居以外何もなく、市街地までは23kmも離れていた。買い物は週1回生協の宅配サービスがあるだけで、住民たちは野菜を自分で作っていたが、獣害によりやめていく人も増えた。集落の機能はほとんどなくなり、月1回の調査訪問が住民の集まる機会となっていた。第4章では住民のエスノグラフィーとして、住民ひとりひとりの生活を明らかにした。単身世帯の住民と夫婦世帯の住民の生活をそれぞれ考察し、高齢者だけの生活を可能にしている要因を考察した。さらに認知機能が低下しても他の住民から排除されることなく生活を続ける、住民間の交流と支援のネットワークを明らかにした。ここでは、住民同士が過度に相互の生活に立ち入ることのない弱いつながり、過去に比較して少ない社会的義務が現在の住民に有効に作用しており、同時に集落外に居住する親族との関係についても干渉されることなく、適度な関係を維持できることが生活への満足度を高める要因として確認された。第5章では、PGCモラールスケールの結果をもとに、住民ひとりひとりの幸せの分析を行った。その結果、住民たちにはほとんど孤独感はなく、日々生きていくことは大変厳しいと感じながらも今の生活に満足していることがわかった。また集落への愛着も高く、いつまでもこの場所で暮らしたいという思いの反面、人に迷惑をかけたくないという思いも強いことが分かった。これらの知見のいくつかは同じスケールを用いた先行研究においても見られ、高齢者の幸福感を考える上で重要なポイントと考える。第6章では幸せに終わることは可能かを考察した。高齢者がこの過酷とも思える環境で生活を維持するには、高い生活力を持ち、自己効力感があり、土地への愛着があり、そして変わりゆく人間関係に適応していく能力が必要と考察した。そして今限界集落が住民たちにとって楽園なのは、不便だけれど、昔よりずっと楽で気ままに生活ができ、住民間は「家族に近い情報を共有しているにもかかわらず家族ほどの親密さはなく、しかし単なる隣人でもないゆるやかな関係」であった。そして他者に迷惑をかけない間はここで幸せに暮らし、それができなくなったら施設に行くという思いがあり、それが長年限界集落で暮らしてきた彼らのプライドであり覚悟であると受け止めた。そしてその時には「ここでのこの幸せな生活」を捨てることも覚悟しながら、しかし「今幸せに生きていること」を大切にしていることが分かった。これらの知見から、限界集落における高齢者の生活が都市部でイメージされる悲惨ものとは大きく異なっており、人の幸福を考える上でいくつもの示唆的な面をもつことが理解される。</p> |                                     |

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 岩 井 恵 子 |     |     |       |
|-------------|-----|-----|-------|
|             | (職) | 氏 名 |       |
| 論文審査担当者     | 主 査 | 教授  | 山中 浩司 |
|             | 副 査 | 教授  | 斉藤 弥生 |
|             | 副 査 | 教授  | 佐藤 眞一 |

## 論文審査の結果の要旨

少子高齢化により急速な超高齢社会をむかえつつある現代日本において、日本全土にわたり膨大な数の集落や居住地域が消滅の危険があると指摘されている。本論文は、和歌山県南部に位置する高齢者のみ13名が居住する集落について、6年以上にわたり実施された資料調査、観察調査、健康診断、幸福度調査、認知機能測定などのデータをもとに、集落の歴史、コミュニティー機能、住民1人1人の生活の変遷、住民間のネットワークについて考察を行い、現代社会では例外的とも言える苛酷な環境の中でも、住民が相対的に生活に満足し、幸せそうに暮らしているのはなぜかを問うた野心的で独創的な研究である。申請者は、2012年4月から2018年3月まで、計76回現地を訪問し調査を実施している。研究は、エスノグラフィーを用いた現地の歴史、生活環境、住民の暮らしぶりの記述と、健康診断、幸福度調査、認知機能測定データなどを用いた、住民の健康状態や主観的幸福度の考察とで構成されており、貴重な情報をふんだんに含むと同時に、生活する高齢者の視点からみた「限界集落」のあり方についてきわめてリアルな姿を描いている。第1章において調査の概要を示した後、第2章では集落の非常に古い歴史と近代における農業、林業の衰退過程が記述され、1970年代以降急速に人口が流出し、「限界集落」と呼ばれる状態になったことが推定されている。こうした歴史記述は、集落の成り立ちや住民が回顧するかつての集落のありようを理解する上で重要であり、とりわけ戦後の集落の状況を理解することは住民が繰り返し指摘する過去の生活と比較して「今は気楽でよい」という述懐を解釈する上で鍵となると思われる。第3章では、集落の自然環境、社会環境、交通手段などについて詳細に論じられており、次章の住民の生活の記述を理解するための基礎的な情報が提供される。とりわけ、都会とかけ離れた自然環境、交通手段、家屋間の距離などについての理解なくしては、住民の生活を理解することは不可能であり、6年間に及ぶ継続調査がこうした環境のもつ重要性を調査者に認識させたことがよくわかる。第4章では、住民1人1人の生活とその変遷について、「単独世帯」と「夫婦世帯」に分けて詳細に記述されており、それぞれの世帯の抱える問題や強みなどが考察されている。また、高齢者だけで居住する「限界集落」という環境が彼らの生活にどのような意味をもっているのか、集落の外に居住する親族（主にこども）との関係が生活をどのように支えているのかについても考察が加えられている。ここでは、住民間の支援ネットワークの存在と同時に、過去の集落の生活と比較して相対的に弱まっている住民間の紐帯（干渉したり、非難したりすることが弱くなっているという意味で）の積極的な作用が指摘され興味深い知見を得ている。第5章では、PGCモラルスケールを用いた住民の幸福度の分析を行っている。スケールの活用は、対象となる集落の住民の幸福度が相対的に高いことを示すために有効であるが、しかし、同時に、個別の項目への回答が示す住民の生活観や人生観の分析、また、住民1人1人の幸福度がどのように変遷しているのか、何がそのスケールの変動に影響しているのかという分析に有効に用いられているように思われる。とりわけ興味を引くのは、加齢とともに様々な役割遂行に支障を来すという冷静で客観的な認識と、生きることは厳しいことだと考える苛酷な人生観が、生活への相対的満足や孤独感のなさや悲嘆を感じない生活と共存している状況である。背景には人生に対する態度のあり方についても、社会的に構築された伝統的な考え方の影響を受け、現代的な視点から見れば不幸の要因と思えるものが幸福の構成要素となっていることが推測される。第6章では、こうした知見を踏まえて、現代社会では例外的とも言える調査対象集落の状況やそこで高齢者の暮らしぶりから、われわれがどのようなことを学ぶことができるかをまとめている。岩井論文は、限界集落における高齢者の詳細な生活の長期にわたる観察と記述という点で、これまでにない研究であり、そのユニークな業績は博士人間科学の学位にふさわしい優れた論文と認める。